本文テキストを用いると，一字索引の作成・利用以外にも種々の利用が考えられる．続日本紀については，例えば記事の件数を日ごとに，つまり大の月では，1～30日，小の月では1～29日に分類集計すると，6日ごとに件数がその他の日に比して減少しているのが観察される．この事実は，既に新潟大学の山田英雄氏により手作業によって確認されたものであるが，計算機を用いると，指定した巻の範囲について計算することが容易である．古代の律令制時代における休日の研究を更に進めるには，計算機を利用するのが有効であると考えている．

最後に，歴史研究への計算機利用に関して指摘したいことは，従来行なわれてきた高度な歴史研究の方法や研究成果の蓄積を無視したのでは，たとえ計算機を利用したとしても研究に役立つとは考えられないということである．

手紙文のデータベース

大阪府立大学 総合科学部　樺　島　忠　夫

手紙の文章は，ただ用件をたすことができればいいというものではない．相手を訪問しての用談の場合と同じく，相手に対するあいさつ，感謝の気持ちの表明，結びのあいさつなど，儀礼上の表現を行なう必要がある．

別に相手に対して感謝の気持ちをもっていなくても，一応あいさつはしなければならないし，その上，言葉遣い，敬語の使い方に誤りがあったり，おかしかったりしてはならない．しかし，仕事の上の手紙を書く場合には「手紙を書く」ことは仕事の目的そのものではなく，仕事に付随する作業である．だから，手紙作成に労力や時間をとられるのは望ましいことではない．

そこで，手紙を書くという作業を支援するソフトを作った．

現在，ワープロで利用できる多くのものは，あらかじめ作成した文章を用意しておき，その中の特殊な箇所だけを書き込むという形のもので，いわゆる常例文システムというものである．

私の作ったものは，それとは異なる．パソコンの画面に，手紙の種類を示したメニューが出る．それを選択すると，目的に応じた手紙文が画面に現れる．その手紙文の中で，自分の場合に合わない内容が部分的にある場合には，そこにカーソルをもって行ってリタンキーを押すと，あらかじめ用意してある他の表現が現れる．その中から適当なものを選択すると，画面上で，その表現を採り込んだ文章に変更される．

例えば，時候のあいさつの場合には，手紙を書いている時が何月かを指定すると，その月にふさわしい時候のあいさつが幾つか画面に現れるから，その中から気に入ったものを選択すると，その表現が画面上の文章の中に収まる．

こういう方法で作成した手紙文は，ファイルとしてフロッピーディスクにセーブした上で，ワープロソフトによって，相手の名前など，場合に応じた特殊な部分の書き込みと自分なりの変更を加える作業をして，印刷をする．作成した文章は保存しておいて，次回に利用することもできるわけである．

このような目的のために，ほぼ500種に近い手紙文のデータベースを作成してある．その構造は次のとおりである．一つの種類の手紙文は，全体を小さな部分に分割して，その部分部分に幾つかの，取り換えのための表現をあててある．画面には，その部分の一番先頭のものがつなぎ合わされて，プリントされる．したがって，部分にあてた表現の順序が変更されると，メニュー選択時に画面に現れる文章は違ったものになる．

現在は，結婚式での仲人のあいさつ(新郎新婦の紹介)や，あらたまった儀式などでのスピーチについて，同様のデータベースを作成中である．

梵文法華経の計量分析

立正大学 仏教学部 伊藤瑞叡
統計数理研究所 村上征勝

法華経は数ある大乗仏教経典の中でも後世に最も大きな影響を与えた経典である．

法華経の原典はSaddharmapundarikaというが，その成立時期及び地方については問題がある．一般に紀元2世紀頃から西北インドで順次成立したとされるが，28品のどの部分がいつ頃成立したのか，また最古層は2世紀頃成立したとしても，全体が完結して現在の形になったのがいつ頃なのか等，未解明の部分が多い．

インドの古い文献では記述された年時を記す例は稀で，記される事実や言語上の特色，説かれる思想の成熟度などから推定を行なうという研究方法がとられる．法華経についても，正統インド社会以外の特殊な集団で説かれた教えであること，思想史的観点から概ね4つの段階を経て現形となったこと，社会経済史的視点から紀元40年～220年頃に主要な部分が成立していたこと，等の主張がなされている．この他にもこの問題を論究した研究は多いが，いずれも細部においては一致せず，未解明のままと言ってよい．

今回の研究は，単語及び文法的な情報をもとに，成立順序の推定を統計分析によって試みようとするものである．今回は分析方法及びデータベース作成における問題点について報告した．